

オウツムといふ。ニオウは稻村の方言である。八丈島では、正月祝ことばに頗ふ事をイネツミと言つた。(八丈島方言俗通志)

破産の忌詞

近江栗太郡では、破産したをケツワッタ、又はナンキンワッタと言ふ。ナンキンも尻の方言である。これは東京でも相場師など使ふ。安藝倉橋島では、人が失戀の爲に、財や職を失ふことをハシガルと言ふ。魚が濱に跳ねあがる事から轉用したのである。同じ島では、木の枯れること、又失敗して財産を失ふことを、共にマイアガルと言ふ。阿波美馬郡でも、失敗することを「あしこの家も、まうて仕舞うたナア」などと言ふ。紀伊日高郡では、失敗することをタンゴワルと言ふ。タンゴは肥桶だから、農夫の造語に違ひあるまい。岡山市では、魚屋の資本が盡きることを「天秤を折る」又は「緒が切れる」といふ。この方は着屋の造語である。商店なれば「歌うた」と言ふ。同じ岡山市の言葉。

結び

以上の内、忌み詞である事を現在意識して使つてゐるのはごく僅である。大抵は、たゞの方言として報告されてゐる。これを忌み詞と認定したのは私の獨斷であるから、誤があるかも知れない。もし、忌み詞といふものを、使ふ人自身が忌み詞である事を意識して使つてゐるものに限るならば、忌み詞

の範圍は非常に狭くなり、この二節は初から成立たない事になる。私は忌み詞を廣く解して、現在は忌み詞でなくても、過去にさうであつたもの、發生的に見てさうであるものをも含める事にした。

忌み詞は必ずしも代へ詞であるとは限らない。唯一無二である場合も随分多い。もし死が忌むべきものであるならば、それを露骨に言ひ現した言葉が唯の一語もあるはずが無い。私は、シヌも亦太古の忌み詞だらうと思ふ。語源は去メか疲メか、どちらかだらう。しかし忌み詞も使ひ馴れれば段々忌みの感じが鈍くなるから、こゝに第二の忌み詞が要求される事になる。過グは第二のそれであり、ゴマルは第三のそれ、テコネルは第四のそれである。かくして、先後相接する場合には、そこに代へ詞の資格も生じ、尊卑の別も生じるわけである。

第十三章 二語折衷の法則

同一の事物、又は、同一の觀念を意味する二つの言葉が、同時に同一の地方に行はれる場合には、屢々、この二つの言葉は、音聲の上に、互に、影響を及ぼし、時として、融合して、一語となる。かやうに、一語が他の語に及ぼす影響を「干渉」と呼び、干渉の結果、二語が融合して、一語となる事を「折衷」と呼ぶ。次に、干渉、及び、折衷の例を擧げよう。

コンジン（乞食）

静岡縣では、乞食をカンジン（勸進）と言ふが、このカンジンがコジキと接觸するに及んで、干渉の結果、カンジイ、コンジイ、コンジン、コンジキ等となつた。これを、カンジンのカ音がコに訛つた等と、音韻的に説明するのは真理の一半を解したに過ぎない。なぜ、カがコになつたかといふ事を、説明を要する事である。

ユスブ（結ぶ）

津輕・石見・安藝・伊豫などでは、結ぶをユスブといふ。ユワエルとムスブとの折衷語である。越前・美濃・備中・石見ではイスブといふ。

ナスゲナイ（情無い）

静岡縣で、情ないをかう言ふ。ナスゲナイとヌゲナイとの折衷語である。

オカシロイ（可笑しい）

埼玉縣北足立郡土合村で、可笑しいをかう云ふ。オカシイと、オモシロイとの折衷語である。

ダイヨロシイ（構はぬ）

播磨東部で、「構ひません」を、かう言ふ。ダイジナイ（大事無い）とヨロシイとの折衷語、むしろ、複合語である。ヨロシイが省略されずに、原形のまゝに含まれて居る。京都ではダイジヨロシイと言ふ。

ヤオモンヤ（八百屋）

上總山武郡で、八百屋をヤオモンヤといふ。「浮世風呂」四編卷之中にも「八百屋さん」とある。八百屋と青物屋との折衷語である。

オチクレル（落る）

阿波名東郡で、落ちることをオチクレルといふ。オチルとアグクレルとの折衷語である。アグクレル（落ちる意）といふ言葉は今徳島縣には無いが、備中にある。但馬・播磨・因幡のアグケル、出雲のアダレル、アダエルはその訛である。

トウブラ（南瓜）

因防柳井町で、南瓜をトウブラといふ。トウナスとボウブラとの折衷語である。

ボウチャ（南瓜）

石見邑智郡で、南瓜をボウチャといふ。ボウブラとカボチャとの折衷語である。

クチハミ（腹）

倭名抄の頭には、蝦を波美と言った。今も、近畿・中國・四國・九州で、さう言ふ。所が、京都では、また、クチナミ（慶長、日葡辭書）クチナメ（易林本節用集）とも言った。今も、東北・關東・中國に、これがある。クチナミは、クチナハとナミとの複合であるらしい。

オラガル（呼ぶ）

土佐では、呼ぶことを、オラガル（幡多郡）オラブ（安藝郡・高岡郡）オロブ（幡多郡）オガル（安藝郡）などと言ふ。オラガルは、オラブとオガルとの折衷語である。

オドサ（糞）

土佐では、糞を、オドロ、オドサ、ウヅソ、ゴソ、ゴッソ等といふ。オドサ、ウヅソは、共に、オドロの訛で、そのオドロは、オドロとゴソとの折衷語だらう。オドロは古語である。ゴソは、奈良市で、糞をガサといふ、そのガサと同じく、ガサ／＼ゴソ／＼して居るから名づけたのだらう。ゴソンドと言へば、糞の中、雑草の生えた所、押人の隅などといふ意味になる。

シグ（死ぬ）

岩手・宮城・秋田・山形・福島・茨城・栃木・千葉・山梨・長野・静岡・石川の諸縣で死ぬをシグといふ。ヌがグとなる例は外にないから、これには、特殊の原因があつたと考へなければならぬ。奈

良朝時代の金石文や萬葉集に、死ぬことをスグルと言つて居る。死ぬを忌んで、「過る」とした忌み詞である。今も、壹岐・越後・秋田で、さう言ふ。奄美大島でも、死人の弔辭の中で、使ふ。このスグルの影嚮で、シグとなつたらしい。昔は、シヌをシヌルと變格に働かせたのだから、シグもシグルであつたに相違ない。とすれば、スグルに一層近いわけである。

マルトメル（丸める）

岩手縣紫波郡飯岡村の人が「藤の蔓ヲ邪魔になるだす、まるとめて置いた」といふので、見たら、廻でからけてあつた。マルメルとマトメルとを一つにマルトメたものである。

マツメル（集める）

集めることをマツメル、又は、マツベルといふ所が各地にある。京阪の古語である。易林本節用集また、下學集の増補に、集の字をマツメルと訓じてある。近松の「孕當盤」に、「御果報は御父清盛（中略）諸人の憎みそねむまで、引きまつてあやかり給へ」とある。マトメルとアツメルとを一つにマツメタものである。二語の折衷は、必ずしも、方言にばかりは限らなかつた。道々しい字書にまで、ちやんと、採用されて、標準語としての權威を以て臨んで居る。

マルゲル（轉ぶ）

周防・長門で、轉ぶことをマルゲルといふ。マロブとコロゲルと折衷したマロゲルの訛ではないかと思ふ。マロブは「女穀油地獄」にもあるから、近い頃まで大阪邊に使はれたらしい。今も、土佐で、轉倒したをマロングといふ。但馬では、マルゲルとも、マゲレルともいふ。これは、油がアルバとなり、小麦がコグミとなる類の子音轉置である。山形縣村山郡でもマゲレル、美濃・若狹・近江・大和・紀伊・播磨・石見・出雲・隱岐・安藝ではマクレルと清む。薩摩でマクイといふのはマクルの訛である。マクルは大和にもある。

セグル（咳く）

淡路で、咳をすることを、セク・セグル・クグルと三通りに言ふ。セグルは、セクとクグルとの折衷語である。土佐では、セクルといふ。

キゲ（杵）

東北六縣・茨城・栃木・千葉・神奈川・靜岡の諸縣で、杵をキギといふ。杵木であるらしい。杵築・臼杵でも判る通り、杵の原語はキである。唯、一音の言葉は言ひ憎く、聞き憎いから、二音にするために、キネとかキギとかしたまゝである。キギは、東北・關東に偏つてゐるから、キネより古いかと思ふ。山梨縣は、古いキギと、新しいキネとの接觸地帯である。その結果、キゲといふ折衷語

が、南巨摩郡、中巨摩郡に出来てゐる。キゲは、埼玉縣北足立郡にもある。

ネジ（虹）

東北全部・關東全部（東京府以外）・越後・長野・山梨・靜岡では、虹をノジといふ。これは、萬葉集東歌の鷲目、天武紀のヌジの訛であらう。ヌジ（上總夷隅郡）ヌーシ（伊豆大島）といふ所もある。倭名抄の頃、京都では、もう、ネジとなつて居た。このネジがノジと接觸するに及んで、ネジといふ折衷形が生れたらしい。ネジの分布は、現在、上總夷隅郡・相模三浦郡・佐渡・信濃・駿河・遠江・能登・福井・飛騨・美濃・尾張・三重・奈良、それから、飛騨れて、隱岐と安藝とにある。

ハワイ（間）

大阪市で、間を、ハワイともハンザイコともいふ。ハザとアワイ（アハヒ）との折衷であるらしい。ハザもアワイも、間といふ意味である。伊呂波字類抄に、間をハサマと訓じて居る。今、ハザ（筑前・伊豫・肥後）ハザラ（出雲）ハザマ（肥後）ハザヤ（肥後、ハザアヒの訛）等といふ。アハヒの方は、類聚名義抄に交の字を訓じて居る。源氏物語に「凡帳のあはひ」とある。方言では、佐渡・飛騨・越前・阿波・備後にある。アワイサ、アワサイと言ふ所もある。

テオキ（手斧）

大分市で、手斧を、テヨキ、テオキ、テオノと呼ぶ。テオキは、テオノとテヨキとの折衷語である。ヨキは斧の古語。

カイビ、ウ（看病）

越中で、看病をカイビ。ウといふ。介抱と看病との折衷語である。

キイコン（黄色）

播磨東部で、黄色をキイコンといふ。キイロとウコンとの折衷語である。

ネンギ、（人形）

埼玉縣人間郡では、人形をネンネともネンギ。ともいふ。ネンギは、ネンネの干渉を受けて、ネンギ。ウが訛つたものである。ネンネは、第一義が赤子、第二義が人形である。

ニンニョ（人形）

盛岡附近では、人形をニンニョ、ニンニョ、ニンギョ等といふ。ニンニョは、ノノと共に、普通、日月星辰・神佛・僧侶・燈明など尊い物を指す幼な言葉である。盛岡附近では、之を人形にまで應用したと見える。それがニンギョと接觸するに及んで、ニンニョといふ折衷語が生れたのであらう。

ホンマク（本當）

甲斐南巨摩郡で、本當をホンマクといふ。ホンマとホンク（共に大阪辯、本當の意）との折衷語である。

イデロウ（いちろ）

四國・中國・近畿から福井・石川・岐阜にかけて、物をいちろる事をイラフといふ。古語である。所が尾張知多郡や佐渡ではイデラフといふ。イデルとイラフとの折衷語である。

ジュルシガキ（熟柿）

長崎市では、熟柿をジュルシガキといふ。ジュクシと、ツルシガキとの折衷語である。

アクト（踵）

踵を中部地方で、アクイ（美濃）アコイ（甲斐）アクタイ（中部地方全部）アクエ（信濃）アコイ（美濃・信州）等といふ。これは、和名鈔のアコエ（距）の系統である。アコエの語源は、足臑（アクエ）であると大槻博士は言つて居る。このアクエ、アコエがカカトと接觸するに及んで、アクト（東北六縣・新潟縣・中部地方全部）といふ折衷語が生じた。中部地方には、アクイ、アクト、カカトと三語が併行はれてゐるわけである。美濃海津郡にはアクイトといふ方言もある。これは、アクイと、アクトとの折衷である。アクイトでは音節が一つ殖えて居るが、上半分が共通だから、折衷す

るとすれば、かうする外に仕方が無かつたのである。

モウク（多く）

「澤山に」をモウニといふ事が茨城・栃木・群馬・長野・八丈島などにある。「物類稱呼」にも、信州と上州のモウニを擧げてある。「東海道名所記」にも、「猛に毛がおへて、おせらしや〜」とある。この「猛」は方言のつもりで使つたのか。モウニは元來、京都の言葉である。安原貞室の「かたこと」（慶安）に、

まうに違ふといふは何ことにや 猛の字歟。蒙の字歟。間敷。又舞歟。立舞に拍子のたがふこと歟
たづね侍るべし

とある。この頃は既に、モウとマウとの發音の區別が失はれて居たので、猛か舞か等といふ惑ひも起るわけだが、「東海道名所記」に猛と書いてあるから、モウの假名に従ふべきである。

岩手縣氣仙郡ではモウト、山形縣ではモントといふ。ウントの影響が認められる。それよりも面白いのは遠江中部のモウクである。これは明かに、モウニと、オホクとの折衷である。モウクは神奈川縣内郷村にもある。鈴木重光さんの方言集に「意外に」と譯してあるが、なほ、用例を問ふべきである。

オソガイ（恐しい）

恐しい事を、佐渡・遠江・美濃・三河・尾張・越前で、オソガイといふ。オトガイ（三重）オスガイ（飛騨）オソングイ（佐渡・遠江・三河）と言ふ所もある。「物類稱呼」の頃は、上總にも、ソソガイがあつた。このオソガイは、オソロシイとコソイとの折衷（むしろ複合）したオソゴワイの訛だらうと思ふ。秋田縣平鹿郡にはオソアブナイ（危険な）といふ言葉もある。これは、オソロシイとアブナイとの複合である。甲斐北巨摩郡青木温泉には、ウソロオカナイといふ言葉もある。

オトロシイ（恐しい）

近畿を始め、西日本には、恐しいをオトロシイと言ふ所が多い。この訛はウトマシイの影響かと思ふ。この兩者は互に影響を及ぼし合つたらしい。ウトマシイがオトマシイとなつたのは、恐しいの影響だらう。この二つは音ばかりでなく、意味の上でも、轉換があつたことは、「近畿方言考」のオトマシイの條に説いた通りである。

ゴクタクズ（役に立たず）

豊後北海郡で、役に立たぬ者をゴクタクズといふ。これは、ゴクツブシ（穀潰し）とヤクニタクズ（役不立）との折衷語である。鷹筑波集（寛永）に「ごくにたぬど、いとほしの人」とある。

ケンカイ（喧嘩）

美濃稻葉郡や阿波南部で、喧嘩をケンカイといふ。ケンカと、イサカイとの折衷である。

ヨウサン（澤山）

「澤山」といふ意味の伊豫方言は、ヨウケとギョウサンとが普通であるが、今治市には、ヨウサンといふ折衷語がある。淡路にも、ヨウケ、ヨウサン、ギョウサンの三つが並び行はれて居る。

オ疲れナサイマセ

伊豫大洲町では、夜他の家を訪れた時、「お疲れなさいませ」とも、「お仕舞なさいませ」とも言ふ。前者は、後者と「お疲れでござんす」と折衷したものである。長野縣では、夜人の家を訪れた時、「おつかれでござんす」とも、「おつかれなさんし」とも言ふ。

アカ（赤子）

赤ん坊をアカといふ所が多い。岩手・山形・埼玉・神奈川・新潟・長野・静岡・石川・愛知・滋賀・岡山・廣島等。これを、赤子、又は、赤ん坊の下略といふのは言ひ足りない。長い言葉なら、簡単にするため、下を略すといふ事もあるが、アカゴは僅か三音だから、略す必要がない。又、「赤」では意味を成さず、従つて通じないはずである。

古く、アコといふ言葉があつた。童男・童女の意である。文安の七十一番歌合に機織女の詞に、「あこよう、簪持て来よ」と、子供に呼び掛けて居る。「源氏物語」に、源氏の君が小君に、「あこは我が子にてをあれよ」と言つた所がある。子供の名にも、阿古君（藤原隆家）アコソノ（紀貫之）アコ麻呂（大納言宗通）などがある。今、紀伊・米子・出雲・土佐で幼い兒をアコといふのはこれである。日向のアコヤンは和子さんと譯してあるから、必ずしも、赤ん坊に限らぬらしい。アコの語源は吾子で、親愛の稱かと思ふが、それはどうでもよい。このアコがアカゴ（赤子）と接するに及んで、互に歩み寄つて、アカとなつたらしい。即ちアカには、アカゴとアコと二つ語源があるわけである。

シヨクム（そねむ）

豊後速見郡杵築で、嫉むことをシヨクムといふ。シヨネム（そねむ）とシヨクムとの複合である。

シヨクエ（机）

机をシヨクといふのは各地にあるが、佐渡や常陸新治郡では、ツクエと折衷して、シヨクエといふ。信州川中島では、シヨクイと訛る。

ナガツラ（ながら）

静岡縣では、「本を讀みナガツラ歩く」といふ所がある。ガツラ（ガテラの訛）ともいふ。さて、

ナガツラは、ナガラとガツラとの折衷語である。

イガリ（蛛網）

蜘蛛の巣を、イガキ、イバリといふ所があるが、常陸では、折衷して、イガリといふ。飛騨のエガラは、イガリの訛であるらしい。

アユク（歩く）

アユムとアルクとの折衷語である。鹿児島縣揖保郡方言。

カケアシリ（駈足）

カケアシ（駈足）とカケハシリ（駈走り）との折衷である。和歌山縣東牟婁郡方言。

ハガミ（葉書）

ハガキ（葉書）とテガミ（手紙）との折衷である。千葉縣香取郡東部で。

ヨケルヒ（翌日）

ヨクジツ（翌日）とアケルヒ（明る日）との折衷である。伊勢四日市方言。

カククマ（肩車）

カタウマ（肩馬）の干渉を受けて、カククルマ（肩車）がカククマとなつたのである。近畿・中

國・四國等で。

サイハタキ（はたき）

サイハラヒ（中部地方・近畿等）とハタキとの複合語である。群馬縣碓氷郡方言。なほ、サイハラヒも、サイハイ（埼玉・富山）とテリハラヒとの折衷語かも知れない。

ナヤス（返済す）

若狭・静岡方言。ナスとカヤスとの折衷語。

折衷が起るためには、二語の間に、音節の一致、又は少なくとも、子音又は母音の一致が存在する事が必要である。次の○印は音節の一致、×印は子音又は母音の一致を示す。

コンジン（こじき、かんじん）

ユスブ（ゆわえる、むすぶ）

ナスゲナイ（なさげない、すげない）

オカシロイ（おかしろい、おもしろい）

ヤオモンヤ（やおもんや、あおもんや）

オチクレル（おちくる、あだくれる）

トウブラ (とうなす、ほうぶら)
ボウチ+ (かほうち、ほうぶら)
オラガル (おらぶ、おがる)
オドサ (おどろ、ごそ)
シダ (しぬる、すぐる)
マルトメル (まるめる、まとめる)
マツメル (まとめる、あつめる)
マルガル (まろぶ、ころげる)
セグル (せく、たぐる)
キゲ (きぎ、きね)
ネジ (にじ、のじ)
ハワイ (はぎ、あわい)
デオキ (ておの、てよき)
カイビョウ (かいほう、かんびょう)

キイコン (きいろ、うこん)
ネンギョ (ねんね、にんぎょ)
ニンニョ (にんぎょ、にんにょ)
ホンマク (ほんま、ほんく)
イチロウ (いちろ、いろう)
ジュルシガキ (じゅくし、つるしがき)
アクト (あくい、かかと)
モウク (もうに、おうく)
オソガイ (おそろしい、こわい)
オトロシイ (おそろしい、うとましい)
ゴクタタズ (ごくつぶし、やくたたず)
ケンカイ (けんか、いさかい)
ヨウサン (ようけ、ぎょうさん)
アカ (あこ、あかこ)

シヨニクム（しよねむ、にくむ）

シヨクエ（しよく、つくゑ）

ナガツラ（なから、がつら）

イガリ（いがき、いばり）

アユク（あゆむ、あるく）

カケアシリ（かけあし、かけはしり）

ハガミ（はがき、てがみ）

ヨクルヒ（よくじつ、あくるひ）

カタクマ（かたくるま、かたうま）

サイハタキ（さいはらい、はたき）

ナヤス（なす、かやす）

もつとも、動詞には、サガネル（さがす、たづねる）ムスナグ（むすぶ、つなぐ）ハボウ（腫れる、いぼう）等、右の法則から外れるものも少しは在る。ダイヨロシイやクチハミは複合だから、別

である。折衷と複合との違は、前者は折衷分子を半分づゝ含み、後者は複合分子の一方を丸のまま含む點にある。シヨクエ（卓）ケンカイ（喧嘩）シヨニクム（憎む）ホンマク（ほんま）ナスゲナイ（すげない）ナガツラ（がてら）オツアブナイ（危い）オソガイ（とわい）等も複合の例としてもよろし。『浮世床』（岩波文庫本四十八頁）に「無もしねへ」とある。「有りもしない」と「無い」との混同で、これも複合の一例か。今、紀伊日高郡で「無いモセンモンヤレルカヨ」（有りもしない物やれるかよ）と言ふ。静岡縣でも、ナイモセンニ（有りもしないに）、ナイマセン（有りません）等と言ふ。

音節の不同は折衷を妨げない。二音節と三音節、又は、三音節と四音節の言葉が折衷する例は幾らもある。又、折衷した結果として、音節の殖える場合もある。イチロウ（いちろ、いらふ）オラガル（おらぶ、おがる）マルトメル（丸める、纏める）等、その例である。逆に、減る事は無い。シダ（死ぬる、過ぐる）は、死ぬが奈變・下二段活用時代には、シグルであつたかと思ふ。